

個別発表

**R.S. Thomas : Iago Prytherch のランドスケープ**

永田 喜文

**R.S.Thomas: Iago Prytherch's landscape**

**Yoshifumi Nagata**

**Abstract**

Among other characters, Iago Prytherch was an important Welsh hill farmer and appeared for 27 years on a regular basis in the early poetry of R.S.Thomas (1913-2000). Thomas, a priest and poet, wrote his first poem on Iago, just after his encounter with a farmer working silently upon an over 1000-foot high hill in November 1942. Clinging to barren hills in the heartland of Mid-Wales, Iago lived a rustic Celtic life, therefore Thomas hoped he would bridge the gap between the real world and Thomas's ideal Welsh-speaking unindustrialized organic Wales; Iago was expected to lead the Welsh people to Thomas's ideal Wales but it was never fulfilled. Readers of Thomas's poetry imagined Iago's 'valley' would be around Manafon, his parish, yet the location has not been identified. Considering Brian Morris's suggestion that it lay in the moor around Cefn Coch, my own fieldwork during summer and autumn, 2001-2007, Thomas's own words and his wife's picture 'Peat Cutting, Cefn Coch' together, I concluded it must be Mynydd Y Gribion, Cefn Coch, 10 miles from Manafon.

R. S. トマス (Ronald Stuart Thomas, 1913-2000) の初期の詩は、トマスが教区牧師として赴任した(1942-55 年)中部ウェールズの過疎の村マナーヴォン (Manafon) 教区を詩に描くことで、ウェールズの

苦境を世に訴えると同時に、ウェールズ人に愛国心を喚起させようとした面がある。これらの詩に 27 年もの長きに渡って登場し続けたのが、ウェールズ人農夫 Iago Prytherch だ。

Iago はウェールズ人の「原型」(‘prototype’)であり<sup>1</sup>、中部ウェールズの丘で自然と密接なケルト的な生活を営む農夫である。同時に Iago は、若き牧師トマスの描く理想のウェールズ像と、現実の間に空く大きなギャップを埋める存在として描かれる。だがその丘の風景となったモデルに関しては、これまでに Brian Morris 氏が Manafon から 10 マイル以上離れたケヴン・コッハ (Cefn Coch) の荒野を指摘しているが<sup>2</sup>、未だ特定されていない。そこで本発表では 2001 年から 2007 年夏から秋に発表者が継続的に行った field work、写真、地図と数々の文献から、その丘の実像を考察した。また発表時には、様々な方がいられることを考慮し、詩の引用はハンドアウトに訳文をつけて掲載するにとどめ、写真を含めた図版や伝記的資料から場所の特定および立証する方法を試みた。

Iago が誕生した背景には、トマスが思い描く「農業で生計を立て、ウェールズ語を日常的に使用する、ケルト的なキリスト教化された平和なウェールズ」というウェールズ理想郷がある。これは主に Toc H のコミュニティ思想、ソーンダース・ルイスが理想に掲げる「自然に囲まれた田舎の集団生活」、アイルランド旅行での経験より得たケルト民族独自言語の大切さ、ピート（泥炭）が喚起させるケルト性などから作られた。同時にここには、近代/現代ウェールズが使用言語により英語文化圏とウェールズ語文化圏に分かれ、ウェールズ語文化圏こそ本来のウェールズの姿であるとウェールズ人指導者ルイスらが説く思想的背景もある。トマスが赴任当時のマナーヴォンの自然環境は、彼の持つ理想に近かった。だがそこで暮らす農夫たちは英語を日常的に使用し、その心は原罪に支配され、病んでおり、理想とはかけ離れていた。

この理想と現実の間のギャップに気づき始めたころ、トマスは、1942 年 11 月、1000 フィートもの標高の荒野で孤独に労働に勤しむ農夫を見かける。この姿に感銘を受け、そこから Iago 初登場となる詩‘A Peasant’が生まれる。Iago は自然と密着して暮らし (=ケルト性)、神の声に耳を傾け (=キリスト教)、労働に勤しむ模範的なウェールズ人農夫として以後も詩に登場し続け、その丘は、荒れ果てて作物も育たないような高地と描写される。

トマスの詩やエッセイから浮かぶその丘の風景には、①荒野、②雲から突き出るほどの標高 1000 フィート以上の高台、③常に風が吹きすさぶ大地、という 3 要素がある。また季節が 11 月と限定されているのも、先の経験からくるのだろうが、一つの特徴である。しかし現地マナーヴォンの風景は、ここから大きく異なる。マナーヴォンは緑豊かな丘陵に囲まれ、周囲の丘の標高も 1000 フィートに満たない。住民が喋るのは英語であり、トマスがケルト性の象徴として挙げるピートも採取できない。

そこで先の条件を満たす地をマナーヴォン教区で探す上で、手がかりになるのが画家であり妻の Mildred E. Eldridge が描いた「ピートの切り出し (Peat Cutting)」(1943 年)(図版 A) と題した一枚の水彩画である。この絵の主題は、ケルト的なウェールズの風景として記録することであり、彼女はそこに孤独な農夫が荒野の丘でピートを切り出すさまを描いた。トマスはこの絵画に触発されたことは、想像に難くない。

(図版 A)



© Victoria and Albert Museum, London.

先の絵の舞台になったのは、先の Morris 氏が指摘しているケヴン・コッハである。ケヴン・コッハには 1000 フィート以上の山が二つ存在するが、発表者自身が 2007 年に地元で行った聞き取り調査によれ

ば、このうち Mynydd Y Gribion (標高 1312-1394ft) ではかつてピートが採取されたという。またその周辺の村では、当時はウェールズ語が使用されていた。実際に現地を訪れてみると、夏だというのに (8月上旬) まるでトマスが最初に衝撃を受けたような、11月を思わせる寒々とした風景が広がる (図版 B)。すなわちここには、先の 3 要素と 11 月を思わせる風景という条件がすべてそろうことになる。

(図版 B)



(c) Yoshifumi Nagata

また Iago の詩について考える際に、トマスのもつ絵画の重要性を考慮する必要がある。トマスは中部ウェールズの自然がいつまでも変わらぬままである様を、絵画の持つ永遠性に重ね合わせて描いているが<sup>3</sup>、Iago がトマスの詩から姿を消す寸前に、Iago の風景が普遍的なものだと繰り返し描かれている。そして Iago が登場する最後の詩‘The Face’では、Iago とその風景そのものが絵画であったかのように描かれる<sup>4</sup>。従って Iago の風景とは、自らの経験と妻 Elsie の絵画「ピートの切り出し」に端を発し、最終的に一枚の「永遠に描き終わらぬ絵」として結実しているともいえる。

これらの事柄から Iago Prytherch のランドスケープとは、Mynydd Y Gribion であり、妻 Elsie が描いた「ピートの切り出し」であるといえよう。

ところでこの山の中腹では、年中吹く風のために風下に向かって傾<sup>かし</sup>

いで育った樹が見受けられた(図版C)。この風景から思い起こされるのは、トマスが幼少から青年期にかけて育った北ウェールズの風景(図版D)である(強風のために傾いで育った樹は北ウェールズの象徴でもある)。実にトマスのウェールズの定義は、北ウェールズの原風景が強く関係している<sup>5</sup>。‘Former Paths’など自伝的エッセイによれば、トマスは幼少での体験を述べ、ウェールズとは「海と丘陵(山岳)地帯」と定義する。トマスは Iago の住む丘の畑を、海の潮に重ね合わせて描くことがあるが、これもこの原風景が関係していると思われる。

(図版 C)



(c) Yoshifumi Nagata

(図版 D)



(c) Yoshifumi Nagata

もしトマスが中部ウェールズの荒野に、故郷北ウェールズの原風景を重ね合わせて描いていたのならば、それはウェールズ英語文化圏に、ウェールズ指導者のソーンドース・ルイスらが属する北ウェールズのウェールズ語文化圏の風景を重ね描いたことになる。トマスはすなわちこの行為を通じて、ウェールズ語の使用を愛国心の象徴とするウェールズにおいて、英語という他の媒体を使用してウェールズ性を描き出した。これはウェールズ語文化圏への敬意の表れであり、この行為を通じて、英語詩人のトマスは中部ウェールズの英語圏にしながら、ウェールズ語文化圏への帰属表明をした。これは、現在、ウェールズ

全人口のほとんどを占める英語を第 1 言語とするウェールズ人が、ウェールズへの愛国心を表明する方法でもある。

註

1. 原型に関しては“Yet this is your prototype” (‘A Peasant’) を参照のこと。またこの中部ウェールズの丘陵地帯に後にウェールズ人となるケルト民族が暮らしていたことは、H. J. Fleure 氏が 1939 年 10 月の *Wales* 誌で発表した、骸骨の大きさや形状を比較した研究が証明している。
2. Brian Morris, ‘The Topography of R.S. Thomas’, *Critical Writings*, p. 116
3. トマスの描く絵画のもつ永遠性に関しては‘The View from the Window’(*Poetry For Supper*)や‘Pieta’(*Pieta*)を参照。前者では丘と絵画の普遍性を描いている。なお詩集 *Between Here and Now* (1981)では、トマスは絵画ゆえの普遍性から神の永遠性を読み出そうと試みている。
4. Iago の永遠性に関しては‘Truth’(*The Bread of Truth*)を参照。なお‘The Face’以降にも 2 回、‘The Grave’と‘Gone?’で Iago の名に言及があるが、Iago が登場する詩としては‘The Face’が最後となる。
5. cf., R.S. Thomas, ‘Former Paths’, *Autobiographies*, translated by James Walford Davies, (Dent, 1997), p. 3